

昔の船旅

野瀬雄平

ここ数年、外出する事がめっきり少なくなった。歳をとって体力が衰えてきたのが最大の原因だが、それに加えてコロナとこの猛暑だ。

海外旅行はおろか、国内の旅に出かける自信もない。行けないとなると余計に旅への思いが募る。そして、自由に飛びまっていた頃の思い出にふける事となる。

印象に残っているのは船旅である。今、考えても贅沢な旅であったと思う。船が好きな私の部屋には、帆船の模型が飾ってある。趣味の一つが、時間と根気のいるこの模型作りだ。

これを眺めていて、帆船へと想像が飛んだ。この頃の船旅はどんなものであったろうか、知りたくなった。どうすればその頃の様子がわかるだろうか。そうだ、有名な帆船の航海についてなら、何か資料が見つかるかも知れない。そこで、よく知られている「メイフラワー号」について調べて見ると、色々な情報が得られた。

この帆船は今からおよそ400年前、イギリスから大西洋を渡って新大陸、アメリカに向かった。船には船客およそ100名と乗組員30名が乗っていた。乗客の3分の1はイギリス国教会の迫害から逃れ新天地を目指していたピューリタンで、後は大陸からラッコの毛皮などの品々を持ち返って一儲けしようとする商人達であった。

船の長さは、およそ30メートル、幅は約7.6メートルである。乗客が寝泊まりする場所は、ガン・デッキと呼ばれる狭い空間である。本来、大砲を置く場所で、床と天井との間は1.4mから1.6m。大人が立てない高さだ。軍艦でない商船にも、海賊対策として大砲を積んでいたという。暗くて湿気が多く臭い絶悪の環境である。ローブなどで仕切り、家族ごとに場所が割り当てられていたという。このような場所で二か月にも及ぶ航海に耐えなければならなかったのだ。

居住環境が悪い上に、航海中の食事でも酷かった。火災を恐れて、海が荒れている時には火が使えず、満足に加熱調理が出来ない。新鮮な食材も無い状況での食事が長く続くのである。

比較的恵まれた商人と、経済的に余裕のないピューリタンとでは違ったかも知れないが、食事のパターンは次のようなものであったと想像される。

朝はビスケットとチーズ、それに火が使える時はベーコン・卵、オートミールなど。

昼と夕食は、乾パン、塩漬け肉のスープ、塩魚などなど。

ここで注目すべきは飲料である。ビールやワインが普通であったこと。贅沢な!と思われ

るだろうが、水は長期保存が難しく、しばしば腐敗したためアルコール飲料となったとある。このような環境で生活を続けていれば、当然病気になる人も多く出る。その典型はビタミンの不足による壊血病であった。

なお、この帆船の本来の目的地は、すでにイギリス人の入植が始まっていた場所に近いハドソン川河口であったが、北風に流されたせいか、冬の寒い時期にマサチューセッツ州のケープコッドについてしまった。その為、やっとたどり着いたのに、多くの人が寒さと病気や飢餓のため、直ぐに死亡したと云われている。

こんな厳しい旅に比べ、自分が経験した船旅はこんな具合だった。例えば、ある一日を振り返ると……。サントリー二島の観光を終えて、クルーズ船に返ってくる。快適な船室にもどりシャワーを浴びて汗をながし、さっぱりとする。バスロープを纏ったままバルコニーの椅子にすわり、冷たいビールで渴きを癒す。船はすでに動き出しており、景色を堪能した島が後方へと流れて去って行く。

客室に毎日配られる船内の予定表に目を通すと、今晚の夕食はイタリアン、ドレス・コードはカジュアルとなっている。さて、今宵はどんな料理が出てくるだろうか。レストランに行くには、まだ少々時間がある。